

「メディア経験を語ること」とアイデンティティ ——マンガに関するインタビュー調査の会話を事例として——

池上 賢

本稿では、現代社会におけるメディアとアイデンティティの関係について、メディア経験を語るという行為をエスノメソドロジーの視点から分析することで明らかにする。筆者は先行研究の問題点として、分析対象となる関係性が事前に同定されていること、データの分析において本人によるアイデンティティの理解が看過されていること、以上の2点を指摘した。その上で、分析の手法としてエスノメソドロジーの視座によりメディア経験を語るという行為を分析することを提案し、インタビュー場面におけるマンガ経験について語るという行為を分析した。その結果、語り手のアイデンティティは場面状況に適合的に語るため、相互行為の中で提示されていること、特定のメディア経験を持たない人でも、当該のメディアとの関係の記述により、アイデンティティを提示しようとするのが明らかになった。

1 研究の背景——メディア研究におけるアイデンティティ

本研究では、メディア経験について語るという行為を、エスノメソドロジーの視点から分析することで、メディアとアイデンティティの関係性の一端を明らかにする。具体的には、インタビュー場면을対象とし、ある個人のメディア経験をめぐる会話の中で、参加者のアイデンティティが提示され、相互に理解可能なものとして位置づけられる様相を分析する。

オーディエンス研究において、メディアとオーディエンスのアイデンティティの関係は重要な論点となり続けてきた。Pertti Alasuutari は、1980年代以降に英国で発達したカルチュラル・スタディーズのオーディエンス研究を世代別に分類・整理している。第1世代の受容研究では、社会集団毎のメディア・テキストの解釈の違いが分析された (Alasuutari 1999: 2-4)。第2世代のオーディエンス・エスノグラフィーでは、「従来の政治に対する関心からアイデン

ティティの政治、特にジェンダーについての問いへの移行」(Alasuutari 1999: 5)があり、オーディエンスのアイデンティティも分析対象となった。

しかし、1980年代後半以降、研究の対象であるオーディエンスの被構築性が問題視された。Alasuutariによれば、「オーディエンスのようなものは、本当は存在せず」「ほとんどの場合特定の分析視座によって生成された言説的な構築物である」という議論が行われた結果、第3世代の「構成主義的な研究」が行われるようになった (Alasuutari 1999: 6)。この過程で、アイデンティティの捉え方も変容した。たとえば、Stuart Hallは、アイデンティティ概念について再検討を行う中で、アイデンティティを「本質主義的」で「つねに『同一』のまま留まっている自己の一片、時を超えてそれ自身と同一の自己」ではなく、「対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される」「たえず変化・変形のプロセスのなかにある」ものとして捉えるべきことを主張した (Hall 1996 = 2001:

11-2)。

このような視点はそれ以降の経験的研究に影響をあたえた。たとえば、Sandra Weber と Claudia Mitchell (2008: 25-47) は、「若者の新しい技術の相互行為的な利用は、アイデンティティプロセスのモデルとして役に立つ」(Weber and Mitchell 2008: 27) と主張する。彼らは、若者による新しい技術の利用にふれ、そのような文化的生産活動を「活動の中のアイデンティティ」として名付けることを提案する (Weber and Mitchell 2008: 27)。そして、具体例として Myspace の利用や、WEB サイトへのフォトストーリーの投稿、学校授業の一環として行われたパワーポイントの作成などを分析対象とした。

高橋利枝は「インフォーマントたちのクリエイティブで、オリジナルな自己形成」について、「自己創造 (self-creation)」という概念を使用する (高橋 2016: 204)。高橋は、若者がデジタルメディアを利用し、さまざまなアイデンティティを創造/再創造していることを主張している (高橋 2016: 203-54)。

Birgitta Höijer はオーディエンスによる自身の理解に着目した (Höijer 1999: 179-94)。Höijer は、我々が「しばしば異なったオーディエンスのアイデンティティを伴っており」、人々は自分自身や家族など「特定の個人と、彼らとメディアの間の相互行為について考えたり、話したりする」ことがあると主張する (Höijer 1999: 179)。たとえば、ニュースやフィクションなどの番組と接する時、我々は我々自身を“良い”あるいは“悪い”視聴者として考える (Höijer 1999: 182)。そのような認知はアイデンティティに関連づけられる。Höijer は、ニュース視聴について「単なる社会的義務に矮小化してはならない」としつつも、「市民の役割という形態の中での社会的アイデンティティは、我々の

ニュース視聴者としての概念化の中に確かに存在する」(Höijer 1999: 184) としている。

オーディエンス研究から派生したファン研究でも、アイデンティティに焦点化する傾向がみられる。元々、オーディエンス・エスノグラフィーは、ポピュラーカルチャーとそのファンを分析対象とする傾向があった。近年では、Jonathan Gray らが、ファン研究の3つの波を整理する中で、第3の波における課題の1つに「社会と技術の観点から、生産と消費の変化から生じた新しいアイデンティティと実践」を挙げている (Gray et al 2007: 11)。

このように近年のオーディエンス研究では、アイデンティティとメディアの関係性についての理論的・経験的な研究が蓄積されつつある。これらの研究は、それ以前の研究と比較して、アイデンティティをオーディエンスが所有する固定的なものとして捉えるのではなく、動的・流動的な構成物として捉えることを特徴としている。そして、現代社会における多様なメディア利用の実情と、アイデンティティの関係についての分析において一定の成果を挙げてきた。

しかし、これらの研究にも問題点がある。第一に、構成主義的な研究でも、それ以前の研究と同じく、何らかの形で研究者が分析対象となる適切な関係を事前に同定している。たとえば、Weber らや高橋の研究では若者が分析対象となっているが、これは、若者が「生まれたときからデジタルメディアに囲まれ」(高橋 2016: 2) て育っており、「若者の新しい技術の相互的な利用はアイデンティティプロセスのモデルとして役立つ」(Weber and Mitchell 2008: 27) と考えられたからである。ファンもまた、それが「現代の文化と社会が働く構造化のメカニズムを研究すること」(Gray et al 2007: 16) になるからこそ、分析の対象とされる。反対

に、対象を若者やファンに限らない分析を行う際は、デジタルメディアではなく、テレビや新聞など社会に広く普及し、日常生活に浸透したメディアと人々の関係がとりあげられる。しかし、メディアと人々の関係は必ずしも常に高い関与の度合いを維持し続けているものではない。たとえば、普段映画をあまり見ない人でも、偶然に視聴した映画を重要なものとして位置づけることがあるかもしれない。構成主義的研究はこのような関係を看過している可能性がある。

そして第二の問題は、分析対象とされる事象の、背景や場面状況の文脈についての、考察が欠如している点である。たとえば、Weberらの研究では、難民を支援するためのインターネット上のプロジェクトに投稿された Walia という 15 歳の難民女性のフォトストーリー（写真や音声からなるコンテンツ）が分析された。Walia は携帯電話をいじめっ子に盗まれたが、紆余曲折を経てこれを取り返した。Weberらは、このエピソードの投稿により Walia は社会的で、強くスタイリッシュな若い女性として自己のアイデンティティを構成したと主張する（Weber and Mitchell 2008: 32-3）。しかし、Walia がフォトストーリーを投稿したプロジェクトサイトは、難民が英国社会に適応し、自信をつけるために作られたものである（Weber and Mitchell 2008: 32）。したがって、「自信に満ちた」アイデンティティを提示することが、当初から目的として求められた可能性があるが、Weberらは、この点について考察をしていない。

また、調査によって得られたデータと、それにより分析されるアイデンティティの記述との関係にも問題が存在する。それは、分析対象となるオーディエンスのアイデンティティが、本当に当人により、そのように理解されているの

かという問題である。Weberらは、Walia が社会的で、強くスタイリッシュな若い女性としてのアイデンティティを構成したという根拠として、フォトストーリーにおいてセクシーなブーツが提示されていること（Weber and Mitchell 2008: 32）を挙げている。しかし、その判断に妥当性があるかは疑問である。このアイデンティティは、Walia の自己の理解とは一致しておらず分析者が付与したものである可能性がある。つまり、構成主義的なオーディエンス研究でも、分析の段階において、オーディエンスから得られたデータと、彼らのアイデンティティを同定する過程において、アイデンティティが構成される状況の文脈が看過されたり、論理的な飛躍が見られたりすることがあるのだ。

2 問題意識

2-1 人々自身によるアイデンティティの理解を把握する必要性

前節では、先行研究の成果と、問題点を記述した。筆者はこれらの問題は、オーディエンスから得られる様々なデータからアイデンティティを同定する際に、語り手自身による理解を看過している点にあると考える。この点について考えるため、改めて先行研究が分析に用いたデータについて考えてみたい。Weberらは具体例の1つとして、難民の女性のフォトストーリーを分析し、彼女のアイデンティティがいかなるものであるか記述した。Höijerもインタビューデータから、オーディエンスのアイデンティティとテレビ視聴の関係を明らかにしようとした。つまり、これらの研究において、アイデンティティは個人に内在する固定的なものとしては捉えられていないかわりに、外部からデータを観察・解釈することで研究者が析出するものに位置づけられている。

しかし、インタビューデータを改めて参照すると、オーディエンスのアイデンティティは、研究者による析出の過程を経るまでもなく、オーディエンス自身がインタビューの中で提示しているように見える。たとえば、Weberらは、「私は自分自身の携帯電話を持つ人間である」という発言を参照し、これが Walia のアイデンティティの重要な次元であると主張する (Weber and Mitchell 2008: 32)。しかし、この発言は彼女のアイデンティティの重要な次元であるというよりは、むしろ彼女が自分自身をどのように捉えているのかという理解を端的に提示しているものと考えられる。研究者が解釈を加え析出するまでもなく、オーディエンスは自分が何者であるのかというアイデンティティを、データの中で示すことがあるのだ。

よって、メディアとアイデンティティの関係性を捉えるには、研究者による析出を行う前に、オーディエンス自身が自分のアイデンティティをメディアとの関係において、どのように提示しているのか、明らかにする必要がある。そのような視点に適合した分析方法として考えられるのがエスノメソドロロジーである。

2-2 エスノメソドロロジーの視座と本研究の分析課題

エスノメソドロロジーとは、「社会のメンバーがもつ、日常的な出来事やメンバー自身の組織的な企図をめぐる知識の体系的な研究」(Garfinkel 1968=1987: 17)である。Harvey Sacks は “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology” (Sacks 1972=1995: 95-173) において、緊急精神治療所における自殺志願者やその代理人と職員との間で行われた電話でのやりとりを分析した。アイデンティティの分析という観点から注目すべきは、Sacks の研究が、電話で

の相互行為の中で、相談者と聞き手がお互いを「相談者」「専門家」として位置づけていく過程を明らかにしている点である。たとえば、相談者は「私には頼れる人が誰もいない」ということを表明し (Sacks 1972=1995: 96)、電話の受け手は「自分が頼られて当然の者であることを示し、さらに自分の立場を唯一適切なカテゴリーに転化」していくとする (Sacks 1972=1995: 158)。Sacks は「赤の他人」である両者が会話を進めていくため、互いにアイデンティティの提示を行っていたことを示唆している。また、Robin Wooffitt は超常現象の目撃者の独白の過程を分析し、少し異常だと思われかねない (Wooffitt 1992=1998: 116) 超常現象について語る際に、語り手は「原因の探求」に触れる (Wooffitt 1992=1998: 117-23) などの手続きを通して、「自分は『正常』で『普通』の人であるという社会的アイデンティティを確立」しようとし、そのために、「カテゴリーメンバースhipを基盤として人々について推論が引き出される組織的な方法についての暗黙的で常識的な理解」を用いている (Wooffitt 1992=1998: 133) と指摘した。

ここで使用されたカテゴリーという概念は論者によって少しずつ異なった定義がされるが、ここでは George Pathas の主張に注目する。Pathas は、カテゴリーという概念を、Sacks の議論を参照しつつ「人を記述するために用いられうる分類や社会的実例」であるとし、活動に用いられる可能性がある記述子は、カテゴリーに関連づけられていると指摘する (Pathas 1999=2000: 45)。たとえば、ある人物がウェイトレスとカテゴリー化される場合、「顧客に料理を出す」という記述子が用いられる可能性がある。このことはメディア経験について分析を行う際に重要である。たとえば、先述した Høijer は特定の番組の視聴が“良い”あるい

は“悪い”オーディエンスとしての認知に関連づけられることを指摘している (Höijer 1999: 181-3)。つまり、なんらかのメディアに関わる活動 (視聴、聴取、読書、ファン活動など) はカテゴリーに関連づけられる記述子になる可能性があるのだ。したがって、本研究においても、なんらかのメディアに関わる活動を語るという行為に注目するため、上記のようにカテゴリーを捉えることにしたい。

また、Bethan Benwell と Elizabeth Stokoe は、エスノメソドロジーと会話分析が「自己は (それが何であれ) 相互行為の達成物であり志向の産出であるという、アイデンティティにたいする状況に依存し文脈に結びつけた理解を採用する」 (Benwell and Stokoe 2006: 36) と主張している。アイデンティティは「人々がお互いに何者であるのか」 (Benwell and Stokoe 2006: 71) という幅広い意味でとらえることが可能である。そして、「アイデンティティ・ワークのレリバンスは話者に内在した志向の中に置かれており、特定の行為の達成に結びついている」 (Benwell and Stokoe 2006: 84)。つまり、アイデンティティとは相互行為の中で、その都度お互いに理解されたり、利用されたりしていくものといえる。

以上を踏まえ、筆者は以下のような分析視座を提案する。まず、メディア経験に関する会話の中で、参与者の「お互いに何者であるのか」というカテゴリーを基盤とした自分自身に関する事柄の提示と、それに伴う理解をアイデンティティとして捉える。その上で、そのような理解が達成されていく過程を詳細に分析する。

エスノメソドロジーは先述した先行研究の問題点を以下のように乗り越えることが出来る。まず、「何らかの形で研究者が事前に分析すべき適切な関係を同定している」という問題であるが、エスノメソドロジーはオーディエン

スがそもそも自分自身のメディアとの関係性について、語る中で示されるアイデンティティについても分析の対象とすることが出来るので、そのような問題が起こりにくいといえる。また、オーディエンスのアイデンティティについて「論理的飛躍が見られる」ことや「構成される状況の文脈が看過されたりする」問題も乗り越えることが出来る。なぜなら、エスノメソドロジーは、アイデンティティをデータ解釈によって析出する構成物としてではなく、インタビュー場面の状況に適合的なものとして、その都度持ち出される「お互いに何者であるのか」という理解として捉えるからである。それゆえに、それが示された文脈も考慮しながら、その提示過程を記述することで、人々のメディア経験がどのようにして、アイデンティティと結びつくのか明らかにできる。以上を踏まえて、本稿では「ある個人のメディア経験をめぐる会話の中で、参与者のアイデンティティがどのように提示されていくのか」という問いを設定する。

3 事例分析

3-1 分析事例とインタビュー調査の概要

以上を踏まえ、本稿では筆者が 2005 年から 09 年にかけて行ったマンガ経験に関するインタビューから 2 人の協力者の語りを分析する⁽¹⁾。本調査は人びとのマンガ経験の人生における様相や位置づけを把握するため行われたものであり、以下のような手順をとった。まず、研究のテーマが“人生におけるメディア経験”であると説明し、協力者のライフストーリーを聞いた。そして、一通りメディア経験を確認した後に、本研究が特にマンガを重点的に対象としていることを協力者に明かし、さらに話を聞いた。もし、協力者がマンガを講読して

いないという場合は、その理由を確認した。協力者の抽出は機縁法によるものであり、マンガとの関与の度合いは協力者決定の際に考慮しなかった。また、必要に応じて複数回のインタビューを行った。

付言すると、本稿の分析対象である語るといふ行為が自発的なものではないからといって、分析の価値がないということにはならない。メディアについて語るという状況は、日常的な文脈においても、ある語り手によって能動的に生起するとは限られない。むしろ、日常の何気ない会話の中で、普段馴染みがないメディアについて何か話さなければならないことは十分に起こりえる。重要なのは、インタビューであるということを含めた、会話が行われる文脈を考慮した分析を行うことである。

3-2 作品内容の定式化とアイデンティティの提示

マンガ経験について語るという場面において、インタビューであるという状況に志向しつつ、語り手のアイデンティティがどのように提示されるのであろうか。マンガ経験について語るという行為を考えたとき、もっとも一般的な事柄として推測されるのが特定の作品の講読や内容に関する感想である。まずは、筆者の職場での知人であった K さん（1985 年 女性 無職）⁽²⁾ に対するインタビューを分析する。K さんに対しては 2 回のインタビューを行ったが、2007 年 5 月に行われた 1 回目のインタビューでは、家庭内の問題や自身の精神疾患などについての話が中心となり、時間の都合もありメディア経験について聞くことが出来なかった。そこで筆者は、2008 年 2 月に 2 回目のインタビューを依頼し、人生におけるメディア経験を中心に話を聞くことにした。2 回目のインタビューで、K さんは、小学校時代は、「活発すぎ

る女の子」であり雑誌『なかよし』を買ってもらっていたこと、中学時代に歌手・浜崎あゆみの楽曲を聞くようになったことなどを語った。

本節で取り上げるのは、上記に続く K さんの高校時代のメディア経験についての語りである。この語りにおいて、小学校時期とは対照的な、現在の K さんの「根暗」という自己アイデンティティが提示される。その「根暗」という言葉がインタビュー中で初めて使われた場面を分析する⁽³⁾。K さんは高校時代に「やっぱマンガ買うように」になったとした。そこで、筆者はどのような作品を読んでいたのかと質問すると、K さんは社会問題などと絡めて女子高生を描くももち麗子の『問題提起シリーズ』を挙げた。K さんはこの後、『問題提起シリーズ』に含まれる作品や扱われているテーマが「世の中の問題」であると語り、印象に残っている作品である「めまい」の内容について説明した。物語は、主人公が薬物を使用するようになり、最後は施設に連れていかれてしまうというものである。〈断片 1〉は、説明が終わる直後の会話である⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

初めに、12～16 行目の筆者の発話から始まる過程に注目したい。筆者は 11 行目の K さんの語りを受けて、「最後どうなるの」と質問し、K さんは「え?」と聞き返す。筆者はほぼ同じ質問を行い、16 行目で K さんは「最後は」「連れていかれて終わり」と語る。ここで筆者による「最後どうなるの」という発話は 11 行目までの K さんの語りや作品の内容を全て語っていないと理解したことを示している。その後、「え?」という聞き返しと再度の質問をはさみ、16 行目で K さんは改めて作品は主人公が連れていかれるところで終わりである旨を語る。この一連の会話はインタビュー場面という状況に志向したものである。D. R. Watson と T. S. Weinberg は同性愛者に対するインタビューの

11	K :	そうそう（施設に）連れてかれちゃうって話なんだけど
12	* :	最後どうなるの
13	K :	え？
14		(0.5)
15	* :	最後はどうなるの？
16	K :	最後はそこから連れていかれて>終わり<

<断片 1 >

分析において、インタビューの形式的な性質の特徴の一つとして、対話者の間にある異なった権利と義務の配分が存在すること指摘する (Watson and Weinberg 1982: 60)。インタビュアーは質問を行うという義務と権利を、インタビュイーは回答するという義務と権利を割り当てられる。つまり、インタビュイーである K さんは回答する義務に基づき作品内容を語るが、筆者はその内容が不完全なものであると考え、インタビュアーの権利に基づき「話は終わっていないのではないか」という質問を行ったといえる。以上を踏まえて、<断片 2 >をの会話を参照する。

まず、17 行目と 18 行目は筆者と K さんによるエピソード終了の再確認である。K さんの「うん」という発話に対して、筆者は 19 行目で「くれ：な：(暗いなあ)」と述べ、K さんが話した作品内容の理解および評価を示す。K さんはその発話を引き取り、20 行目で「暗いでしょ」「そういう暗いご本なんですよ」と述べこれに合意する⁽⁶⁾。

また、K さんの発話は、筆者の評価が妥当であるという理解を示すとともに、「めまい」という作品、および扱われて来たテーマを定式化している。定式化とは本来はある出来事を、言語を用いて公式化したり、定義したりする際に行われる活動であるが、エスノメソドロジーにおいては、人々の日常的な実践の一つであると捉えられる (Garfinkel and Sacks 1970: 350-4)。

具体的には会話を記述したり、説明したり、要点について説明することなどが含まれる (水川 2007: 31)。そして、『定式化すること』それ自体も、次の会話の資源としてのインデックス的表現となる (水川 2007: 33)。実際、この定式化は K さんの購読した作品の内容を記述する表現となっているだけでなく、この後の K さん自身のアイデンティティの提示と関連づけられるものになっている。K さんは作品について「あんまり覚えていない」し、<断片 3 >のように語った。

K さんは筆者の 27 行目の質問に回答し、28 行目において「今は持っていない」と述べるが、筆者は「でも一番印象に残っているんだ？」と質問している。この発話は、インタビュアーによる質問をする権利の再行使であると同時に、この後につながる会話の起点になっている。K さんは 30 行目で「残ってるね」としつつ、「売春」「ストーカー」など、同シリーズの他のテーマに触れる。筆者は、31 行目で「なんで覚えている」「そういうの」と尋ねているが、この発話も重要である。なぜなら、筆者は単に K さんが作品の内容を印象深いものとして捉えていることだけでなく、「めまい」のテーマである「覚せい剤」だけでなく「売春」や「ストーカー」といったテーマも同じ分類に含めることに同意しているからである。そして、この会話でなされた合意は、<断片 4 >における K さんのアイデンティティの提示を可能にする。

17 * : >てとこで終わり<
18 K : うん
19⇒* : くれ: な:
20⇒K : 暗いでしょ (.) そ: いう暗いご本なんですよ
21 * : ふんふん

<断片 2>

26 K : アバウトにいえばそんな感じ
27 * : 今は持ってないわけ?
28 K : 今はもう持ってない>全部<
29 * : でも一番印象に残っているんだ
30 K : う: ん残ってるねあと売春とかストーカーとか
31 * : なんで覚えてるの () そういうの

<断片 3>

32⇒K : なんてだろうね(.)根暗だからかなって思っちゃうんだよね
33 (2.0)
34 * : は:
35⇒K : 自分が根暗だから: (.)よけ: 覚えてるのかなっていうのもあるし:
36 * : うん

<断片 4>

Kさんは「なんでだろうね」疑問を示し一呼吸置いた後、「根暗」という自身の性格に関するカテゴリーを提示する。そして、2秒間の沈黙に続く、筆者の「は:」という発話に続けて「自分が根暗だから余計に覚えている」ことを示している。ここまでの会話からわかるように、Kさんのマンガ作品に関する会話では、作品の内容に関する定式化（「暗い」）、作品内容がKさんにとって「印象に残る」こと、“売春”や“ストーカー”といったテーマも含まれるということが、筆者とKさんとの相互行為の中でお互いに合意されている。そして、そのことが32行目においてKさんが自身のことを「根暗」と提示することを可能にしている。つまり、メディア経験に関する会話の中で、参加者は当該の文脈に志向しつつ、自分が何者であるのか示すのである⁽⁷⁾。さらに、この後続く<断片5>では、<断片4>で示された「根暗」という

Kさんのアイデンティティが今度は、会話の資源となることが分かる。

37行目でKさんは「病気系」「問題系」に関心があるとする。筆者は38行目で自身の理解として「社会問題のこと」という定式化を提示し、Kさんは即座に合意を示す。さらに、Kさんは「ニュースは興味ない」としつつ、「人間」に「興味」というキーワードを示し、「医療ミス」という事例を提示する。この後、Kさんは幼少期から老化してしまう病気の患者を取り上げたテレビのドキュメンタリー番組を視聴することを述べ、<断片6>のように語る。

ここでKさんは、さらに自分自身について記述している。57行目においてKさんは「人の痛みを知りたいのかな」と述べる。筆者は59行目で「それはなんで?」と質問を行いKさんはそれに対し60行目から62行目で「人と接する機会がなかったから」「人のことを良く知

37⇒K : 後は病気系とか(.)そういうの興味あ-問題系とか興味があるから :
 38 * : 問題系って社会問題のことだよ
 39 K : =そうそう社会系に(.)ま(.)ニュースは興味ないよ
 40 * : うん
 41 K : 社会問題的に>なんか<(.)人間 () てるのにすごい
 42 興味があるのかなっていうのもあるし
 43 * : うん
 44 K : 医療ミスとかもさ
 45 * : は : は : は :
 46 K : () 見るのかな

<断片 5>

57⇒K : なんか (1.0) やば (1.5) 人のなんか痛みを知りたいのかな
 58 (1.5)
 59 * : それは何で?
 60⇒K : て言う感じ(.)人と接する機会がなかったから : (.)
 61⇒ 人のことを良く知りたいのかな
 62⇒ だから : (.)こ : ひと : の痛みを知れるようなマンガを読むのかな : (.)
 63 * : う : [ん]
 64 K : [て] いう感じ(.)あたしはね疑問系だけど
 65 * : あ :

<断片 6>

りたいのかな」「人の痛みを知れるようなマンガを読むのかな」と語る。一連の発話で、Kさんが「問題系」「病気系」といった関心と、「人と接する機会がなかった」という経験を述べていることは、Kさんが、筆者との間で一応の合意がなされた「根暗」というアイデンティティを資源にすると同時に、理解可能性を高めているものと見なすことが出来る。

すでに述べたとおり、インタビューの参加者は語り手／聞き手というカテゴリーに志向している。そして、当該の状況においては、原則として支離滅裂ではなく一貫性のある話が求められる。先述した Pathas は「相互行為においては、トークにおいてカテゴリー化がなされてお

り、また用いられている (ママ) ののであれば、そのカテゴリー化にレリヴァントな述語が見出されることを期待してよい」(Pathas 1999=2000: 45) とする。また、Lena Jayyusi は、ある人々をカテゴリー化するタイプの記述が、特徴や実践のリストの産出を通して継続されると指摘する (Jayyusi 1984: 23)。これを踏まえると、筆者と Kさんは、会話という相互行為の中で、そのような実践を行っていることが分かる。筆者と Kさんの会話を振り返ると、Kさんは筆者による作品内容に対する「暗い」という評価を資源として、自分自身を「根暗」というアイデンティティを提示し、さらに当該のアイデンティティを用いて、それに適合した自分自身の

関心や、人と接したことがないという経験を示したといえる。さらに、それらの要素は一貫性のある語りとして理解可能になるように提示されている。つまり、一連のマンガ作品について語るという相互行為では、インタビュー場面の中で、Kさんのアイデンティティが提示されると同時に、続く会話の資源になっているのである。メディアとアイデンティティの関係性は会話する二人の相互行為の中に提示され、会話の成立のために利用される事柄として見出される。

3-3 印象深いメディア経験を持たない人のアイデンティティの提示

前節では、メディア経験を語るというインタビュー場面における相互行為と、その中で産出され相互に理解されるアイデンティティの存在を確認した。しかし、ここで一つの疑問が浮上する。先述の通り、筆者は対象者決定の条件としてマンガとの関与の度合いを考慮に入れている。したがって、協力者の中には、マンガに関する経験をまったく持たない人や、持っているとしても限られた物であるという人々もいた。そのような人々は、はたして、マンガ経験と自己のアイデンティティを結びつけようとするのだろうか。もし、するならば、それはどのような形で行われるものなのだろうか。

以下は筆者の小学生時代の同級生であり、SNSの利用をきっかけに交流が再開したCさん（1978年 男性 会社員）との会話である。Cさんのインタビューは2007年8月の1回で終了している。ここで示す語りは、Cさんのライフストーリーを概観した後に生じたもので、幼少期のメディア経験について聞こうとした際のものである。Cさんは幼少期のテレビ視聴について質問された際に、関西出身の親戚から小学校入学祝いに野球チーム・阪神タイガー

ズのグッズを買ってもらったことをきっかけに「阪神ファン」となり、それ以降野球を視聴し続けたことを語っていた。また、大学進学後はメジャーリーグも視聴するようになった。そこで筆者はCさんに対して、野球以外にテレビで見ていたものはないか質問した。しかし、Cさんはバラエティ番組について「縁がなかった」とし、さらに「ドラマなんかもってのほか」と述べた上で、〈断片7〉のように語った。

Cさんのアイデンティティはマンガについて語る場面ではなく、テレビ視聴について語る中で、「ほんっとに野球」ばかり見ていたという活動の記述と、「野球を見るのは好きだった」という表現により提示されていた。そして、より興味深いのが、Cさんが〈断片7〉で提示したアイデンティティが、この後生起したマンガやアニメに関する会話の中でもインタビュー場面に適合した語りを産出するために利用される点である。

筆者は上述のCさんの発言に対して、「ほかの番組を見てはいけない」ルールがあったのではないかと質問した。しかし、Cさんはこれを否定し、改めて野球が「とにかく好き」だった語った後、少し考えてから小学生の頃にアニメ『ドラゴンボール』を視聴していたと語った⁽⁸⁾。ただし、〈断片8〉〈断片9〉にあるように、Cさんにとっての作品の位置付けはKさんとは異なるものであった。

〈断片8〉の01行目でCさんは『ドラゴンボール』について「ちょっと見たかも」と述べている。筆者はCさんの発話に重なる形で「ああドラゴンボール」と述べ、内容などを聞くこともなく03行目で「ドラゴンボールは見た？」と発話している。ここでは、筆者が作品の内容を聞かず質問を行い、かつCさんも回答を行っている点に注目したい。ここでは筆者も作品概要を知っていること、つまり『ドラ

16 C : 結構見る番組って決まり切っていましたよほんとに野球でしたから : :
 17 もそれこそ(1.0)なんていうのかな(.)メジャーリーグを知ってから :
 18 ¥あ-朝メジャー¥見て : 夜日本の野球見るなんていう生活が
 19 何か月も(.)続いたりとかしましたからね(.)休みの日なんかは
 20 * : =へ :
 21⇒C : そのくらい野球をみるのはね : 好きだったですね
 22 * : へ : :

<断片 7>

01 C : ドラゴンボールとかちょっと見たかもしれない[な : : :]ええ
 02 * : [ああドラゴンボール]
 03 * : =ドラゴンボールは見てた?
 04 C : いや

<断片 8>

ゴンボール』に関する事柄が共有知であることが合意されている。その後、Cさんは「いや」と述べ、筆者は再度質問する（<断片 9>）

Cさんは質問に対して、6行目で「どこまで定期的だったかは覚えていない」としつつ、14行目まで『ドラゴンボール』のアニメを視聴したきっかけが自発的なものではなく母親からの勧めであったことを述べている。さらにCさんは作品との関わりが特別なものではなく、当時の時代状況に関連していたことを<断片 10>で示す。

16行目でCさんは作品が「相当なベストセラー」であるという位置づけを示しており、筆者はそれに同意している。さらに、Cさんは18から19行目で「定番中の定番」「ごたぶんにもれずよく見てた」という表現を使用する。この発話は、同作品の視聴が同年代の人々にとってありふれた経験であることを示唆する。この後、筆者がこの発話に異議などは挟まず次の質問に移行していることを踏まえると、ここでCさんと筆者の間で、『ドラゴンボール』について、ありふれたものであるという一定の合意がなされたといえる。その後、筆者は『ドラゴン

ボール』の単行本や、掲載誌「週刊少年ジャンプ」を読んでいなかったか確認する。しかし、Cさんは家庭のルールでは「週刊少年ジャンプ」は購読できなかったとし、月1冊だけ単行本を買ってもらえたことを語った。<断片 11>はその後に続く会話である。

筆者は32行目でCさんに「単行本」を買ってもらっていたのであれば、何らかのマンガを読んでいたのではないかとこの点を質問している。Cさんは質問に対し笑いながら、「それも野球のマンガ」だったと述べる。この場面はCさんが少し前に示した「野球をみるのが好き」という発話を再利用し、自身のアイデンティティを再提示した場面である。

Cさんは『ドラゴンボール』のアニメやマンガについて「親から勧められた」、「定番中の定番」であったなど、積極的に講読したのではないことを示していた。言い換えれば、Cさんは自分自身を少なくとも熱心なアニメやマンガのオーディエンスと位置付けていなかった。このことは、Cさんの「野球が好き」というアイデンティティを際立たせる。実際に34行目から筆者はCさんの発話に重複して、「あ、野球の

05 * : 見るまで行ってない?
 06 C : =どこまで定期的だったかは覚えてないんですけど(.)はじめてその
 07 ドラゴンボールがテレビでやるときに()お袋がドラゴンボールっての
 08 * : =うんうん
 09 C : =始まるみたいよ(1.5)>だから<(.)たぶんご飯の支度かなんかして:
 10 子供にからまれてちょっとやかましいから:ていう
 11 見せとけみたいな(.)感じだったんじゃないですかね
 12 まあ>覚えてないんでよくわからないんですけど<要は
 13 新聞の:テレビ欄をお袋が見て:(.)ドラゴンボールってのが始まる
 14 らしい[わよ]って言って:その:第1回の時をみて
 15 * : [うん]

<断片 9>

16 C : まあでもあ:れわねあの:相当なベストセラーっていう[か]
 17 * : [うん]
 18 C : 定番中の定番なわけでしょ(.)まあ(.)ごたぶんにもれず
 19 よく見てたと思いますよ(.)なんか
 20 * : (1.0)原作のマンガとかジャンプとか読んでなかったの

<断片 10>

31 A : そこ(買って良いものに)にジャンプってものではなくて
 32 * : で単行本ってことは:(.)マンガ読んでたったことなのかな
 33⇒C : と思います(.)でもそれもねh:野球の ¥マンガだった¥[結構]
 34 * : [あ:]
 35 野球のマンガだったの[ねお]
 36 A : [うん]
 37 * : =ぼえているのありますか?

<断片 11>

マンガだったのね」と述べているが、これはCさんが示した「野球をみるのが好き」というアイデンティティと「野球のマンガを読む」という結びつきを適切なものとして受け止めたことを意味している。

そして、この後の<断片 12>で、Cさんは当該のアイデンティティをさらに利用し、筆者の質問に答え、当時連載されていた作品『県立海空高校野球部員山下たろーくん』⁹⁾に言及する。<断片 12>の38行目においてCさんは「山下なんとかくん」と述べる。筆者は40行

目で「山下たろーくんかな」と作品名を示し、Cさんも同意する。Cさんの、この発話は「野球をみるのが好き」というアイデンティティに基づいているからこそ、可能なものと推測できる。なぜならば、仮にCさんがマンガ好きとして作品を語るのであれば、基本的には正式な作品名を覚えていることが規範的なものと見なされるからである。しかも、Cさんは43から44行目において筆者が正式な作品名である「海空高校野球部員」と述べる途中でこれを遮って「なんかありましたね」と述べている。そのあ

38 A : 山下なんとかくとかいうの [が]
 39 * : [あ]
 40 山下たろーくんかな
 41 A : あ：そうですそうです(.)それは結構買って読んで[ました]
 42 * : [あれでしょ]
 43 あの(.)海空高校野球部員[()]
 44 C : [あ：なんかありましたね]
 45 * : でも内容はあまり覚えてないかな覚えているかな
 46 C : =いやでも小学生の読むような奴ですからこうちょっと：
 47 不器用なところもある：主人公ががんばってでかいホームランを
 48 打つような内容だったんじゃないですか

<断片 12 >

と、筆者は 45 行目で内容を覚えているか質問するが、「小学生の読むような奴」と位置付けたうえで、曖昧な内容のみ語っている。

一連の会話を再確認する。まず、Cさんは筆者に「野球をみるのが好き」であることを提示する。その後、Cさんは筆者に『ドラゴンボール』のアニメを見ていたことを述べ、筆者との間における知識の共有も確認される。さらに、Cさんは作品を知るきっかけと「定番」であったという視聴理由を語る。次に、筆者の原作マンガを読んでいなかったのか、という質問に対して、同作品や掲載誌は購読しておらず、マンガ単行本を買ってもらっていたと語る。そして、筆者のマンガを読んでいたのかという質問に対して、それも野球のマンガであったと述べ、自身の「野球をみるのが好き」というアイデンティティを再提示するのである。

Cさんは、マンガというメディアとの接触がありふれたものであることを示しつつ、購読していたのは自身のアイデンティティと関連する作品に限られていたという、インタビューに適合する一貫性のある語りを産出している。本節で示したCさんの語りは、オーディエンスは、先行研究の研究者が同定したようなメディアと

の一定以上の関係を持っていなくても、メディア経験について語る際に、自分自身のアイデンティティをメディアに関わる活動と関連づけて提示することを示している。

4 結論

ここまで、個人のメディア経験をめぐる会話を分析した。では、「ある個人のメディア経験をめぐる会話の中で、参加者のアイデンティティがどのように提示されるのか」、という問いにどのような回答を示せるだろうか。まずは、本稿の分析で確認できた知見を確認する。

第1に、本稿で示した事例では、インタビュー場面という状況に適合した語りを産出するための実践とアイデンティティの提示が行われていた。また、そのようなアイデンティティは、メディア経験の中に位置づけられる何らかの活動(作品の講読など)を、適切な記述子とするカテゴリーを基盤としていた。たとえば、Kさんは購読したマンガ作品に関する筆者の「暗い」という評価をリソースとして、自分自身を「根暗」と提示し、「問題系」や「病気系」に関心があることを語っていた。また、Cさんも自身が

「野球をみるのが好き」であることを示し、「野球マンガ」について語っていた。二人とも、講読したマンガ作品を定式化し、その定式化が自分のアイデンティティと関連づけられている。つまり、アイデンティティと定式化を適合させることによって、二人は自分のアイデンティティをインタビュアーにも理解可能なものとして提示しようとしていた。

第2に、上述した事例で示されるように、提示されたアイデンティティは、後に続く会話において利用可能なリソースとなっていた。2-2で紹介した超常現象に関する語りでは、語り手が「カテゴリーメンバーシップを基盤として人々について推論が引き出される組織的な方法についての暗黙的で常識的な理解」(Wooffit 1992=1998: 133)を用いて語りを達成していた。本稿の事例も、同様の手続きを表しているものといえる。

第3に、今回の分析では、当該の場面状況において話題になっているメディアに関する経験を相対的に持たない人であっても、自分のメディア経験をアイデンティティと結びつけようとするのが明らかになった。たとえば、Cさんは、『ドラゴンボール』のマンガについては読んでいたとしなかった一方で、インタビューに適合した語りを算出するため「野球好きだから」「野球マンガを読む」として自身のアイデンティティと適切な活動を結び付けていた。このような状況は、さまざまな場面状況、さまざまなメディアについて起こりえるものである。例えば、映画をあまり見ない人物が、友人同士の会話で映画について話すように促されるといったことは日常生活でも起こる。この場合、当該人物は発言を拒否することも可能だが、本稿の事例のように自身のアイデンティティに関連づけ、何らかの経験を語ることもあり得る。

なお、本稿におけるマンガ経験を相対的に持

たない人の語りに関する知見は、従来のオーディエンス研究に対して重要な論点を提起する。先述のように、オーディエンス研究では、メディアとアイデンティティの関係は、特定のメディアに対する強い関心が作り出すものと考えられてきた。しかし、本稿で得られた知見からは、メディアとアイデンティティはいかなる関係性においても結びつきうることが示された。

以上をまとめると、「ある個人のメディア経験をめぐる会話の中で、参加者のアイデンティティがどのように提示されるのか」という問いにたいして、「アイデンティティは、特定の場面状況における個人のメディア経験と適切に結びつけられることによって、会話を行う両者双方に理解可能なものとして受容できるように提示される」という回答を示すことが出来る。この時に提示されるアイデンティティは、先行するオーディエンス研究が想定してきたジェンダーや若者、ファンというアイデンティティに限定されるものではない。また、当該のアイデンティティはそれに続く会話に利用されていく。したがって、メディア経験について語るという行為を、エスノメソドロジーの視点から分析することで、明らかになった現代社会におけるメディアとアイデンティティの関係性の一端とは「相互行為の中でのアイデンティティの提示にあたって、メディア経験は利用可能なリソースの一つ」だということである。

注

- (1) 本稿はメディア経験一般に関する研究として位置づけられる。ただし、マンガは特定の読者層に対するクラス化が非常に進んだメディアであり、特定のジャンルと読者の関係がしばしば指摘される。その意味で、本研究のような分析にとって適格的であるといえる。

- (2) なお、協力者の情報はインタビューを行った当時のものである。
- (3) 付言すると、Kさんは中学校時代の経験について語る過程では、自分自身の性格について特に言及はしていなかった。
- (4) 付言すると、施設に連れていかれるという結末は主人公が立ち直る可能性を示唆するものであるが、筆者とKさんの間では、そのような理解がなされていないことは興味深い。
- (5) 本論文で使用しているトランスクリプトは以下の通りである。

(.)	0.2秒未満の短い間
(0.5)	0.2秒以上の間。数字で示している。
(())	動作や注釈など補足説明
:	音声の引き延ばし。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応
-	言葉が不完全なまま途切れている。
=	前の発話との間に、まったく間がない。
↑	音調の極端な上昇
> <	前後に比べて目立って早く発話されている。
° °	相対的に小さい声で発話されている。
[発話の重なる開始位置
]	発話の重なる終了位置
¥ ¥	発話が笑いながらなされている
H	笑い
()	聞き取れなかった箇所。
?	語尾の音が上がっている。

- (6) 付言すれば、Kさんはこの場面において筆者の「暗い」というネガティブな評価と理解可能な発話に対し同意を示すことで、筆者と知人同士である程度親しい関係にあるということを再確認している可能性がある。
- (7) なお、本稿で取り上げた事例では、インタビューという状況により語り手／聞き手が相対的に明確になっているため、語り手として位置づけられるインタビュー어의アイデンティティが提示されているが、語り手／聞き手両方のアイデンティティが提示されることも状況によっては、起こりえることは指摘しておきたい。
- (8) なお、『ドラゴンボール』（作：鳥山明）の連載は1984年から1995年であり、アニメも放映されていた。
- (9) こせきこうじ作。1986年から1990年まで『週刊少年ジャンプ』（集英社）において連載された野球マンガ。

文献

- Alasuutari, Pertti, 1999, "Introduction: Three Phases of Reception Studies." *Pertti Alasuutari eds., Rethinking the Media Audience*, Sage, 1-21.
- Benwell, Bethan, and Elizabeth Stokoe, 2006, *Discourse and Identity*, Edinburg University Press.
- Garfinkel, Harold, 1968, "The origin of the Term 'Ethnomethodology'," *Purdue Symposium on Ethnomethodology*. Reprinted in : Roy Turner ed., 1974, *Ethnomethodology*, Penguin:15-8.(=1987, 山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳「エスノメソドロロジー命名の由来」『エスノメソドロロジー——社会学的思考の解体』せりか書房, 11-8.)
- Garfinkel, Harld and Harvey Sacks, 1970, "On Formal Structure of Practical Actions," John C. Mckinney and Esward Tiryakian, eds, *Theoretical Sociology: Perceives and Developments*, Appleton-Century-Crofts, 338-66.
- Gray, Jonathan, Cornel Sandvoss, and C. Lee Harrington , 2007, "Introduction Why Study Fans?" , *Fandom: Identities and Communities in a Mediated World*, New York University Press,1-18.
- Hall, Stuart, 1996, 'Introduction: Who Needs Identity' , Stuart Hall and Paul du Gay eds., *Question of Cultural Identity: Who Needs Identity*, London, Thousand Oaks and New Delhi.(=2001, 宇波彰他訳, 『カルチュラル・アイデンティティの諸問題——誰がアイデンティティを必要とするのか?』大村書店.)
- Höijer, Birgitta, 1999, "To be an Audience." Pertti Alasuutari eds., *Rethinking the Media Audience*, Sage, 179-94.
- Jayyusi, Lena, 1984, *Categorization and the Moral Order*, Routledge Revivals.
- 水川喜文, 2007, 「エスノメソドロロジーのアイディア」前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編『エスノメソドロロジー——人々の実践から学ぶ』新曜社.
- Pathas, George, 1999, "Studying the organization in action: Membership categorization and interaction analysis," *Human Studies*, 22:139-62, (=2000, 前田泰樹訳, 「行為における組織を研究すること——成員カテゴリー化と相互行為分析」『文化と社会』2, マルジュ社.)
- Sacks, Harvey, 1972, "An Initial Investigation of Usability of Conversational Data for Doing Sociology," David Sudnow ed, *Studies in Social Interaction*, The Free Press:31-73, Note:430-431. (=1995, 北沢裕・西阪仰訳, 「会話データの利用法——会話分析事始め」『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社:93-174.)
- 高橋利枝, 2016, 『デジタルウィズダムの時代へ——若者とデジタルメディアのエンゲージメント』新曜社.
- Watoson, D, R and T. S. Weinberg, 1982, "Interview and the Interactional Construction of Account of Homosexual Identity" *Social Analysis*, 11:56-78.
- Weber, Sandra and Claudia Mitchell, 2008, "Imaging, Keyboarding, and Posting Identities: Young People and New Media Technologies" David Buckingham eds., *Youth, Identity, and Digital Media*, The MIT press, 25-47.

Wooffitt, Robin, 1992, *Telling Tales of the Unexpected: The Organization of Factual Discourse*, Prentice Hall/Harvester Wheatsheaf. (=1998, 大橋靖史・山田詩津夫訳, 『人は不思議な体験をどう語るか——体験記憶のサイエンス』大修館書店.)

(いけがみ さとる、立教大学、satoruikigami@gmail.com)
(査読者、足立加勇、佐々木啓)

“Narrating about Media Experiences” and Identity: A Case of Conversation about Interview Survey on Manga

IKEGAMI, Satoru

The purpose of this paper was to clarify the relationship between media and identity in contemporary society, from the viewpoint of ethnomethodology. We pointed out problems of previous research. First the relationship to be analyzed was identified beforehand. Second, understanding of identity by the person himself / herself is overlooked. With that in mind, We proposed the analysis about the act of narrating media experiences ethnomethodologically and analyzed the interview data. As a result, following findings were revealed. The identity of narrator's was presented in mutual action in order to speak conformably to the situation. Even a person who does not have a specific media experience relatively can present an identity by describing the relation with the relevant media